



三島由紀夫

永田円了

Man of Integrity

三島由紀夫を語るには、かくも小さな自分を顧みず、とにかくいま何か文字に残したいという一心で書きしるす。三島の自決から50年。今だ色あせない記憶と気概が語られる。60年代若者たちのエネルギーは躍動していた。権力の荒廃と物欲主義に走る親の世代に疑問をもった多くの学生たちが行動を起こした。正義の牙は、日本中の大学で勃発していた。

「私はフランス語を教えているだけで、日本社会のことは分かりません」。教室になだれ込んできた学生運動家の問い詰めに、しどろもどろに答える大学教官の姿が鮮明に思い起こされる。知識のみを売り物にし、本気でこの世に対峙していない大人に、純粋な若者たちは立ち向かった。

三島由紀夫はまさにこの運動のさなかに、自らの命を賭して次のように檄をとばした。「戦後日本の経済的繁栄にうつつを抜かし、国民精神を失ひ、本を正さず末に走り、その場しのぎと偽善に陥り、自らの魂の空白状態へ落ち込んでゆくのを見た」。これでいいのかと。

三島と陽明学

三島の言動を見ると、「知行合一」で知られる陽明学の思想抜きに語ることはできない。15世紀中国、明の時代に誕生したこの思想、江戸期の日本に伝わり大流行する。当時は「心学」と呼ばれ、吉田松陰はじめ多くの学者たちに影響を与えた。明治時代になって、王陽明が説いたこの「心学」が「陽明学」と呼ばれるようになり、維新の登場人物の多くは、この陽明学の徒であった。



この思想にあって事を起こすとき、それが成功するかしないかは第一義ではない。結果がどうかということは問わないのである。むしろ結果の利益を論ずることは、この学問のもっとも恥じるところなのである。この学問にとって第一義とは、「**その行為そのものが美しいかどうか**」だけである(司馬遼太郎著『峠』より)。

それほどまでに、日本人の思想の一部となっていた陽明学が、どうして現在人の目に触れないのか。

言い換えれば、50年前に「知行合一」の思想が具現化された学生運動のあの熱は、今どこへ行ってしまったのか。知識ばかりを詰め込み、行動しない頭でっかちの学者たちに、三島は堂々と檄をとばしたのである。

三島と“死”

「死を生前提として生きた時の心理状態は、今に比べて幸福だった」。「自分が死ぬと決まっている人間の幸福感というものは今はない」と三島は語る。三島にとって“死”は、真に生きるために不可欠なものであった。『憂国』の中で、「この喜びは最終のものであり、二度とこの身に返っては来ない。これから如何に長生きをしても、これほどの歓喜に到達することは二度とない……」。新妻との“最後の営み”の記述は三島の“死の美学”を生々しく語っている。

また体験についても次のように語る。「体験というものは、分からないところに隠れていて、道を歩いてちょっと石につまずいて、その石というものは人生で大きな意味をもつこともある。そういう体験が大事なのだが、そういう体験を自分で大きな意味を持たすという能力も大事なんだよ」。

三島由紀夫、本名・平岡公威(きみたけ)享年45、の生きる深さ、他者への共感、言行一致、語りつくせない。

<事例 DVD>

三島と東大全共闘／『憂国』／死を前提にした生
西部邁・三島を語る／死は生を凌駕する
陽明学／司馬遼太郎著『峠』より、継之助の生き方
相撲／横綱相撲とは、横綱の品格とは、
吉田松陰／黒船に向かう／『龍馬伝』より
ラグビー「日本 vs. スコットランド戦」2019年

円了のホームページ：www.enryo.jp

